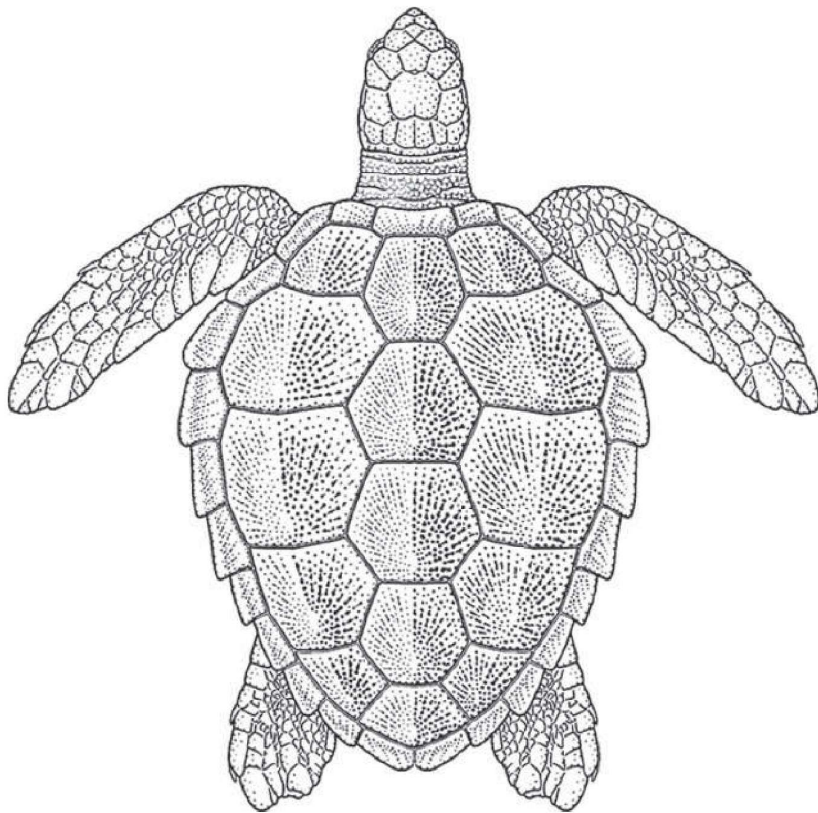


爬虫類



絶滅危惧IA類 (CR)

アカウミガメ

Caretta caretta

爬虫類概論

● 爬虫類・両生類分科会／橋元浩一・菊水研二・江頭幸士郎・川原二郎

■ 概要

県内には現在までにカメ目5種（外来種を含む）、有鱗目11種の合計16種の爬虫類が分布している（福岡県爬虫類目録）。福岡県RDB2014作成時と同様にそれら全種を対象として、確認位置を環境庁の3次メッシュや日本測地系の緯度、経度で記録し、現地調査を行った。また、分布情報として分科会委員と調査協力者による現地情報、関連文献、河川水辺の国勢調査などで得られたデータを含め、掲載種選定の評価をした。

現地調査では目視および可能であれば採取をして同定を行った。また、ヘビ類では同定が可能な場合に限り脱皮殻も含め、やはり同定が可能な路上死体（DOR：Dead on road）も対象として記録した。

爬虫類の生活には気温や餌となる生き物の生息も欠かせない。また、夜間に活動する種も多いため、適宜、夜間調査も実施し、こうした調査結果に基づき分科会委員の総合的な判断により、掲載種として選定した。

種の同定には日本爬虫両棲類学会編（2021）、高田・大谷（2011）、内山ほか（2002）、千石（1979）、中村・上野（1963）などを用いた。種の分類と和名に関しては日本爬虫両棲類学会の日本産爬虫両生類標準和名（2023）に従った。なお、前回よりニホンスッポンの学名が変更になっているが、研究が進んだ結果、分類学的に細分化され、日本国内の在来種の学名は*Pelodiscus japonicus*に変更になった。なお、従来用いられてきた学名*Pelodiscus sinensis*は和名をチュウゴクスッポンとされ、九州には食用・養殖用に持ち込まれた外来種である（Suzuki et al., 2014；日本爬虫両棲類学会，2023）。これら2種の外見での識別は現状では困難であり、また国内では交雑個体も報告されていることから、今回の改訂作業においては、暫定的に県内のスッポン属は単一種であるとみなして記録を集積した。

また、県内の海岸からはアオウミガメ、ヒメウミガメ、タイマイ、オサガメ、セグロウミヘビなどの海生爬虫類の記録もある。ただし、ほとんどが漂着死体のため、本調査では上陸して産卵記録のあるアカウミガメのみを対象とした。

■ 選定基準

今回掲載種として選定した爬虫類は絶滅危惧IA類1種、絶滅危惧IB類1種、情報不足4種の合計6種で、前回に比べると1種除外している（新旧対照表参照）。この数は福岡県産爬虫類の37.5%に当たる。とりわけカメ目、有鱗目のヘビ亜目で生息環境の変化による減少が起こっている。カテゴリーが前回から変更されたもののうち、アカウミガメについては近年県内での産卵成功例が減少しており、県内繁殖個体群の絶滅が強く懸念されることから絶滅危惧IA類とした。また、特にニホンイシガメは外来種のみシシッピアカミミガメとの競合で生息環境や餌を奪われ、近年問題になっている外来種のアライグマによる食害で減少の一途を辿り、更にはクサガメとの交雑個

体もみられるため将来を危惧し絶滅危惧IB類とした。タカチホヘビは今回の調査により前回改訂時よりかなり多くの地点から記録を得られたが、これは必ずしも本種の個体数が増大したことを示すわけではなく、主に調査手法の発展のためである。したがって今回および過去のデータを元に増減率などを評価することは適切でないと判断し、加えて生息環境の選好性が強いことを考慮し、情報不足として今後の推移を見守ることとした。シロマダラおよびジムグリは検討できる増減のデータが乏しいため、こちらも将来の継続調査を見据えて情報不足とした。

■ ハビタット

爬虫類の生息する環境の多くは餌生物との密接な関係にある。特に今回選定したヘビ類の希少種は狭食性の強い種類で、個体数維持には餌となる動物の生息できる環境も併せて維持していく必要がある。

1. 海岸，海洋

海岸に上陸し産卵するのは県内ではアカウミガメのみである。また、岡垣町を中心とした県北部沿岸はこの種の日本海側における数少ない産卵地の一つとなっている。この環境の問題は海岸に残されたゴミである。また、オフロード車の乗り入れによって生じたタイヤの轍による砂浜環境の攪乱も懸念される。これら轍やゴミなどは成体の上陸後の移動や孵化後の幼体が海へ戻る際の妨げになり得る。全国的には、ウミガメの産卵の見物についても一定のルールを設けている例がある。また、卵を保護目的で採取・移動し、人工的に孵化させようとする働きについては、孵化個体の性比や孵化後の生存率に影響する可能性があるため、専門家の意見を取り入れつつ慎重に実施する必要がある。またウミガメ類全体の特性として、周辺海域も重要な生息域になるため、海洋汚染、特に誤飲されるおそれのあるプラスチック漂流物の増加も減少の要因となり得る。このほか、海中に設置された網に絡まって死亡する例が報告されるため、注意が必要である。

2. 河川，池沼，水田

両生類を捕食するヘビ類および淡水性カメ類にとって最も重要な環境である。すなわち、シマヘビ、ヒバカリ、ヤマカガシ、ニホンマムシ、ニホンイシガメなどであるが、種類数からいえば福岡県産ヘビ類全8種のうちの半数に当たるヘビ類の主要な餌場となっている。生息の重要拠点がここにあるため、餌となる両生類（主にカエル類）の増減は、ヘビ類の生息数に大きく係わってくる。

カメ類は普段こうした水中で暮らすほか、冬眠をはじめ、産卵もこの周辺で行われるため、コンクリートで作られた三面張り河川では水流が速くなり、また岸の土壌を掘削することができないため、カメ類の生活には適さない。

3. 山地

人との接触を嫌う多くのヘビ類にとって、最も潜むのに適した環境が山地である。ここで顕著な爬虫類はタカチホヘビとジムグリである。タカチホヘビは体鱗が敷石状に並ぶという、乾燥に弱いヘビであるため、日中はガレ場の石の下や倒木の下に潜み乾燥から身を守り、主に夜間に活動する。ジムグリは、かつては平地でもみかけられたが、宅地造成などの影響からか、現在みられるのはほとんど山地の森林である。山地で実施される開発には林道建設、森林伐採、砂防ダム

建設などがあるが、平地に比べ開発の影響は小さいと考えられるため、個体数が急変する可能性は小さいと推測される。

4. 人家周辺

有鱗目のトカゲ亜目（ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、ニホンヤモリ）とヘビ亜目のアオダイショウが住家棲（シナントロープ）の爬虫類として有名である。これらは人家周辺の公園や草地、石垣などでうまく生息し、アオダイショウなどは古民家に棲みついて餌となるネズミや小鳥などを捕食することもある。ニホンヤモリに至っては人家での生活に依存している傾向さえある。しかも、他の爬虫類に比べ、生息のみであれば住民が無関心であることが多く、駆除されることもないため、個体数の増減は少ない。また、人家周辺の倉庫などの構造物では稀にシロマダラもみられる。シロマダラは基本的に夜行性のヘビで、夜間に徘徊してニホンヤモリや石垣の奥などにいるニホントカゲを主に捕食する。路上死体でみつかるとも多く、そのことが新たな分布地点と記録されることもある。一般に認知されているよりも広範に分布している可能性があるが、小型で夜行性のヘビであるため、正確な生息状況を知ることは困難である。

■ 保全対策

淡水性カメ類では、産卵、冬眠および甲羅干しなどの生活のすべてのサイクルが河川や池沼とその周辺に依存している。このため、包括で連続的な自然環境の保全が重要である。海性のアカウミガメでは産卵に必要な奥深い砂浜が重要で、特に産卵期には人が安易に砂浜へ立ち入らないような対策の検討が必要である。ヘビ類では餌動物の増減によって個体数が変動するため、餌動物の生息環境を含めた保全が重要である。

また、県内では過去にワニガメ、カミツキガメ、ハナガメ、オオトガケ類やシャムワニの捕獲例があり、これらは飼い主が遺棄したり、逃亡したりして野外でみつかったとみなされる外来種である。ニホンイシガメとハナガメとの交雑とみられる個体も採取されている（鈴木 大、私信）。また、最近ではコンテナに紛れて発見されたタイワンスジオ（ヘビ）やホオグロヤモリの記録もある。ペットの遺棄は論外だが、このような外来種の侵入にも注意しなければならない。また、近年特に憂慮すべき外来種が哺乳類のアライグマで、県内全域に生息地を広げている。すでにニホンイシガメで食害も確認されており、捕食されたと思われるヘビ類の死体もみつまっている。これは爬虫類にとって脅威で、アライグマ駆除は最重要で取り組むべき案件と考える。

■ 調査協力者名

池田 治，鶴川 亮，鶴木陽子，内田隆志，内田洋子，海の中道海洋生態科学館，小川真樹，熊谷拓時，坂本由美子，杉田聖子，鈴木 大，平野晴美，松尾裕子，松藤宗一郎，吉森安英

■ 写真提供者名

鶴川 亮，菊水研二，橋元浩一

■ 参考文献（引用文献）

環境庁. 1997. 都道府県別メッシュマップ40福岡県. 環境庁, 東京.
中村健児・上野俊一. 1963. 原色日本両生爬虫類図鑑. 保育社, 大阪.

日本爬虫両棲類学会（編）. 2021. 新 日本両生爬虫類図鑑. サンライズ出版, 滋賀.

日本爬虫両棲類学会. 2023. 日本産爬虫両生類標準和名. 日本爬虫両棲類学会, 京都.

千石正一（編）. 1979. 原色 両生・爬虫類. 家の光協会, 東京.

Suzuki,D. and Hikida,T. 2014. Taxonomic status of the soft-shell turtle population in Japan: a molecular approach. *Current Herpetology*, 33(2): 171-179.

高田榮一・大谷 勉. 2011. 原色爬虫類・両生類検索図鑑. 北隆館, 東京.

内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関 慎太郎. 2002. 日本の両生爬虫類. 平凡社, 東京.

表 爬虫類-1 福岡県爬虫類目録

目名	科名	種 名	
カメ目	イシガメ科	ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i> (Temminck et Schlegel, 1838)
		クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i> (Gray, 1831)
	ヌマガメ科	ミシシippアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i> (Wied, 1839)
	スッポン科	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus japonicus</i> (Temminck et Schlegel, 1838)
	ウミガメ科	アカウミガメ	<i>Caretta caretta</i> (Linnaeus, 1758)
有鱗目	ヤモリ科	ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i> (Duméril et Bibron, 1836)
	カナヘビ科	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i> (Schlegel, 1838)
	トカゲ科	ニホントカゲ	<i>Plestiodon japonicus</i> (Peters, 1864)
	タカチホヘビ科	タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i> Peters, 1869
	ナミヘビ科	アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i> (Boie, 1826)
		シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i> (Boie, 1826)
		ジムグリ	<i>Euprepiophis conspicillatus</i> (Boie, 1826)
		シロマダラ	<i>Lycodon orientalis</i> (Hilgendorf, 1880)
		ヒバカリ	<i>Hebius vibakari vibakari</i> (Boie, 1826)
		ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus</i> (Boie, 1826)
クサリヘビ科	ニホンマムシ	<i>Gloydus blomhoffi</i> (Boie, 1826)	

表 爬虫類-2 新旧カテゴリー対照表

	福岡県RDB2014のカテゴリー							再選定種数※	追加種数※	掲載種数※
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足			
今回のカテゴリー	絶滅							0	0	0
	野生絶滅							0	0	0
	絶滅危惧IA類				アカウミガメ			1	0	1
	絶滅危惧IB類					ニホンイシガメ		1	0	1
	絶滅危惧II類							0	0	0
	準絶滅危惧							0	0	0
	情報不足					タカチホヘビ	ジムグリ シロマダラ	ニホンスッポン	4	0
	(合計)							6	0	6

上位のカテゴリーに移行
 下位のカテゴリーに移行
 カテゴリー変更なし

	福岡県RDB2014のカテゴリー							合計種数
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	
今回除外した種※						ヒバカリ		1

今回追加した種	
今回のカテゴリー	絶滅
	野生絶滅
	絶滅危惧IA類
	絶滅危惧IB類
	絶滅危惧II類
	準絶滅危惧
	情報不足

※ 再選定種数 …福岡県RDB2014の選定種のうち、今回（福岡県RDB2024）でも再び選定した種の数。
 追加種数 …福岡県RDB2014の選定種以外で、今回（福岡県RDB2024）において新たに選定した種の数。
 掲載種数 …福岡県RDB2024に選定した種の数。（「再選定種数」と「追加種数」の合計）
 今回除外した種…福岡県RDB2014の選定種のうち、再評価の結果、今回（福岡県RDB2024）は選定しなかった種。

アカウミガメ

Caretta caretta (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧IA類(CR)

2014
絶滅危惧IB類環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 かつては福津市から岡垣町にかけてや、北九州市若松区などの海岸で継続的に産卵していたが、近年は記録が途絶えがちで、数年間まったく産卵・孵化が確認されないこともある。死んで漂着したものや衰弱個体の記録も多い。プラスチック製の海洋ごみなどによる悪影響も懸念される。

危機要因 海岸開発, 気候変動, その他(海洋ごみ)

分布情報 北九州市若松区, 福岡市東区, 宗像市, 古賀市, 福津市, 糸島市, 芦屋町, 岡垣町

種の概要 甲長が最大で1mに達する大型のカメ。海洋で生活し、産卵のために上陸する。産卵は初夏から夏にかけて行われ、晩夏に孵化した幼体は海流に乗って北太平洋を大きく回遊し、成長すると繁殖地周辺に戻ってくるようである。日本沿岸は北太平洋においてはほぼ唯一の産卵地であり、また県内の産地は日本海側の数少ない産卵地の一つである。

特記事項 —



撮影: 江頭幸士郎

ニホンイシガメ

Mauremys japonica (Temminck et Schlegel, 1838)

絶滅危惧IB類(EN)

2014
絶滅危惧II類環境省
準絶滅危惧

選定理由 里山環境の減少とともにその姿を消しつつある。外来種による悪影響が生息数の減少に拍車をかけている。外来種であるミシシippアカミミガメに食物や生息環境を奪われ、アライグマによる食害を受けるとともに、クサガメとの交雑個体も県内で複数確認されている。

危機要因 河川開発, 湿地開発, 土地造成, ダム建設, ため池改修, 水路改修, 水質汚濁, 外来種侵入(アライグマ, ミシシippアカミミガメ), 競合種拡大(ミシシippアカミミガメ, クサガメ), 異種交雑(クサガメ)

分布情報 北九州市門司区, 福岡市東区, 福岡市西区, 福岡市早良区, 筑紫野市, 春日市, 太宰府市, 糸島市, 上毛町

種の概要 浮世絵にも描かれるなど、昔から日本人には馴染みのカメ。本来の生息域は、河川の上流部から中流部、ため池や田んぼなどだが、季節によって移動し里山環境を上手に利用している。黄色がかった甲羅が特徴。比較的低温に強く、春や秋に交尾をするとされるが県内では冬に水中で交尾をした例もある。日本固有種。

特記事項 —



撮影: 菊水研二

ニホンスッポン

Pelodiscus japonicus (Temminck et Schlegel, 1838)

情報不足(DD)

2014
情報不足環境省
情報不足

選定理由 河川や池沼に棲むカメで、県内では広範囲から記録があるほか、養殖個体の放流も行われている。ただし、こうした放流個体には外来の近縁種チュウゴクスッポンが紛れていることが指摘されており、実際にこちらの種も九州で確認されているほか、本州では2種の交雑個体が確認されている。こうした状況から純粋な本種の個体数は減少していると想定されるが、外部形態での種や雑種の同定が困難であるため、県内での実態は不明である。

分布情報 北九州市八幡東区, 北九州市八幡西区, 福岡市東区, 福岡市博多区, 福岡市早良区, 大牟田市, 久留米市, 直方市, 田川市, 柳川市, 八女市, 筑後市, 大川市, 行橋市, 中間市, 筑紫野市, 宗像市, 太宰府市, 古賀市, 福津市, 宮若市, 嘉麻市, 朝倉市, みやま市, 那珂川市, 新宮町, 水巻町, 東峰村, 大木町, 広川町, 添田町, 荻田町, みやこ町, 上毛町



撮影: 菊水研二

タカチホヘビ

Achalinus spinalis Peters, 1869

情報不足(DD)

2014
絶滅危惧II類環境省
一

選定理由 県内では、ほぼ山地の溪流沿いにあるガレ場のみで見られる。このような環境を好む習性から生息地も自ずと限られてくる。現時点ではそういった環境は比較的維持されているが、依存性が強いので、今後の環境の変化によって個体数が減少することも考えられる。

分布情報 北九州市門司区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市早良区、久留米市、直方市、飯塚市、八女市、豊前市、筑紫野市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、久山町、岡垣町、桂川町、香春町、添田町、赤村、福智町、築上町



撮影：鶴川 亮

ジムグリ

Euprepiophis conspicillatus (Boie, 1826)

情報不足(DD)

2014
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 中型のヘビで過去には平地でもみられていたが、近年では山地の森林で見られることがほとんど。地中に潜る性質があり、平地での宅地造成などで個体数が減少した可能性が高い。今後の開発具合によっては更に減少することも考えられる。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、久留米市、飯塚市、八女市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、赤村、みやこ町



撮影：橋元浩一

シロマダラ

Lycodon orientalis (Hilgendorf, 1880)

情報不足(DD)

2014
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 小型で夜行性のヘビ。生息環境を特に選択する種類ではないが、広範囲に生息すると考えられている割には情報量が極めて少なく、個体数はそう多くはないと推測される。また、轢死体が割とみられていることから、生息地と人の生活圏が重複する部分も多いらしく、継続的な調査も必要である。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市城南区、飯塚市、八女市、豊前市、中間市、筑紫野市、宗像市、うきは市、宮若市、朝倉市、那珂川市、宇美町、新宮町、岡垣町、川崎町



撮影：橋元浩一